



弘大農学部同窓会会報

第13号

平成4年7月31日 発行
 発行 弘前大学農学部同窓会
 TEL. 0172-36-2111
 振替 盛岡4-564番
 印刷 (株) 笹 軽印刷

今回は、中尾良仁会長の発案により会長の挨拶をとりやめ、その代りに桜庭誠蔵、今哲廣の両副会長に所感を述べていただくことにした。

台風19号の残したもの

副会長 桜庭 誠蔵

昨年9月28日の台風19号は、弘前消防署の風速計が35m、黒石市役所屋上の風速計が60mを記録して計測不能に陥ったのを始め、青森地方気象台で瞬間最大風速53.9mを記録するなど予想をはるかに超えた大型台風であった。

このため、あちこちで建物の屋根が飛び、電柱が軒なみ倒れ、電話不通や停電があいつぐなど被害が続出し、特に被害が最も大きかったのは、収穫を目前にしたりんごで、足の踏み場もないほど地面に散乱し、方々でりんごの巨木が根をむき出して倒伏した。

この被害は、弘前市を中心とした津軽地方にその被害が集中し、県全体で34万5千tの落果、倒伏したりんご樹が57万本など、被害金額はりんご関係だけで742億円と空前の額にのぼった。

また、このりんご落果数は、全国生産量の3分の1、りんご主産地弘前市の2年半分に匹敵し、被害の大きさに唯々圧倒されるばかりで、これによって本県経済活動に及ぼすマイナス効果は計り知れようもなかった。

この大惨事に対して、天皇陛下からお見舞いのお言葉が寄せられたのを始め、全国各地から暖かい励ましの手が差しのべられた。

また、大手スーパーやデパートが落果りん

ごやジュースを全国チェーンで販売したのを契機に、全国各地で購入運動が始まり、現地ではりんごジュースの生産が追いつかないなどの嬉しい悲鳴もでた。

さらに落果りんごの収穫や選別作業に高校生や家庭の主婦などが連日に亘って参加するなど、被害農家及び関係者共々大いに心強く思い、これを支えとして半死半生の状態から起死回生への機会を得、一気に立ち上がりの構えを見せ始めた。

これらに対して全国の皆様には、この紙上をお借りして、心からお礼を申し上げます。

この春、津軽の野づらでは白いらんごの花が一面に開花し、あの悪夢を忘れたかのようなどかな風景が見られた。



直径90cmのアオモリトドマツ無惨(藤崎農場)
 1991年9月28日、台風19号の被害

しかし、本県のりんご産業はこれからが正念場であり、いつまでも甘えは許されない。

目に見えない園地回復の遅れは、減収となり、また農家の負債整理もジワジワと後追いつてくるなど多くの問題を抱えている。

中でも、後継者不足や高齢化が進む社会情勢下にあつての多難な再出発である。

しかし、全国的なブランドとなった落果りんごを通して、多くの人達の好意に触れ、生

産地と消費者の交流をさらに深めるなど逆境から得たものが極めて大きかった。

この教訓をもとに、りんご王国の名に恥じないよう生産に励むことが、全国の皆様のご恩に報いる唯一の道であると信じている。

最後になりましたが、同窓生皆様方の青森りんごに対するご厚情を切にお願いすると共に、各位のますますのご健勝とご活躍を心からお祈りいたします。



会報発行にあたって

同窓会副会長 今 哲 廣

同窓生の皆様いかがお過ごしでしょうか。

今回の会報発行に当り「たまには副会長が挨拶を書け」という中尾良仁会長（青森県農林部長）の命により、筆無精の私が「微罰」的に書くハメになったことをお許いただきます。

さて、農学部同窓会は設置42年を迎え同窓生も3千名を越え、“伝統”ある同窓会に成長した。弘前大学の中で特異な存在ともなっている農学部同窓会の副会長を預って、今さらのようにその責任を感じているこの頃であります。

というのも、昨年8月青森県農業会議の会長を引受して以来特に同窓生諸氏とめぐり会う機会が頻繁となったのです。県内では県農林部を始め農協各連合会、各団体、自治体等どこに行っても同窓生にめぐり会うし、県外でも県庁や団体職員として、また全国的な機関等の職員として活躍している方々にめぐり会い、心からたのしく感じている今日此頃だからです。（特に県外で同窓生と突然会うのはうれしいものですね！）

ところで、農学部というところで農業に関する学問を“かじった”仲間として、最近の「食糧・農業・農村」をめぐる諸問題には多かれ少なかれ皆様関心をお持ちのことと思います。小生も農業全般に関わる者として悩みもするわけですが、いまだに乳離れしないと

いうか、田辺前学部長先生を学識経験の常任会議員の一人としてお迎えしてお力を借りている状況であります。

さてわれわれの関わる食糧についてですが、国是として国政の中でどう位置づけるか、この辺が政策の中でフラフラしていることが農政基盤の定っていない原因であろうと思われます。日本国民の主食である米の自給体制を守ると国会で三度も決議しながら、GATTで自由化を迫られるとすぐに財界主脳や一部政党幹部がそれを容認する発言をする等、国是として食糧問題が位置付けられていない現状をどう考えるのか…。東欧諸国やソビエト連邦の崩壊が、食糧をはじめ消費物質の欠乏ないしは流通の不均等に発端があったことに歴史的な教訓はないのか…。政治の中で国民の命の糧の位置付けが明確でないことに肌寒さを感じる思いであります。どの政党が政権を担っても人間の命のエネルギー源としての食糧と、水や熱、光の源であるエネルギー資源をどう形でどれ位確保するのかは国民的課題として重要な問題であると思います。

今、人類社会の将来を展望し、人口問題、エネルギー問題そして環境問題等々国際的な議論が行なわれるようになって来ましたが、そして“経済大国日本”として国際協力を常

に要請される時期にあるとき、国民合意の基準を作っておくことが強く求められているのではないのでしょうか。農業及び関係の業界に深く、そしてその数においても大きな影響を与え得る立場にあるわが農学部同窓生の責務もまた大なるものがあるのではないのでしょうか。食糧や関連商品を造る人、そしてこれを流通させる人、生産や流通がうまくいくような政策行政に携わる人、そしてこれらに従事する人を造る人等々、広範に広がるわが同窓

会諸氏のそれぞれの役割がどのように果されるかが、この日本のそして青森県の発展に大きな影響を与えるのではないのでしょうか(おおげさ?)。いやそのような気概を持って仕事をしたと小生自身に言い聞かせている此頃であります。

まずは同窓会員諸氏が健康で仕事に生き妻を持ち、ますます社業の発展に、地域の発展に、自らの豊かさの発展に寄与されることを願って、そして学部の発展を願って会報発行の挨拶とさせていただきます。農学部万歳!

弘前からの便り (続)

農学部長 正木進三

その後御無沙汰していますが、お元気でしょうか。早いものですね。昨年この誌上でお便りしてから、何時の間にか、また岩木山に残雪が輝く季節になり、昨秋の台風を耐え抜いたりんごの樹々が、若葉を茂らせ秋の実りの準備を始めました。過ぎ去ってみれば短い一年ですが、いろんな出来事が、わが農学部にもありました。

1953年、文理学部農学科として送りだした最初の卒業生は、わずか4人でしたが、今年の春には遂に同窓生の総数が、3,000人を突破し、これから半世紀後の節目には、1万人を越えることは確実です。時と共に累積して行く、それは歴史の重みだといえればそれまでですが、深山の谷間から滴る清水がせせらぐ溪流となり、谷を削る奔流となり、次第に幅を広げ深さを増して、悠々と流れる大河になるように、我らが母校も未来を目指して、絶え間なく着実に前進して来ました。

流れ来る水は、流れ去った水が大地に刻んだ跡を満たして、河の力となります。長年に亘って教育・研究に精進し、本学部発展の筋道を付けて、多大の貢献をして下さった武田太一先生(農業機械学)と原田順厚先生(園芸産物利用学)が、この3月に退官されました。両先生のこれまでの御努力に、皆さんと共に心から拍手を送り、また今後の御支援をお願

いしたいと思います。武田先生は5月27日、めでたく名誉教授の称号を受けられました。

他方、この一年間に多くの新進気鋭の先生方をお迎えました。赴任順に紹介しますと、大町鉄雄助教授(生物機能開発学)、佐野輝男助教授(生物環境管理学)、富田正徳助教授(園芸農学)、元村佳恵教授(生物資源利用学)の4人です。また戸次英二、新関稔両先生は教授に、城田安幸、荒川修両先生は助教授に、工藤明、角野三好両先生は講師に、それぞれ昇格され、本学部の教官陣は、ますます強化されてきました。これによって、博士課程の連合農学研究科も、ますます充実されるでしょう。この研究科には社会人も入学できますから、研究心に燃える先輩諸君も、挑戦してみませんか。

大学設置基準が改訂されて、1年になりました。40年の歴史を持つ教養部の廃止、それに伴うカリキュラムと学部の改革や自己評価システムの導入など、他の多くの国立大学と同様に、本学も今これらの問題に取り組んでいます。1990年に大講座制への改組をし、その学年進行が1993年にやっと終了する、というこの時に、また大きな波がやって来たのです。この怒涛をくぐり抜けて、この学部の一層の充実を目指して、教官一同大いに頑張りたいと思います。御支援をお願いします。

平成3年度で定年退官されました農業システム工学科生産機械学講座(旧農業工学科農業動学講座)の武田太一先生にご寄稿して載しました。

農業機械分野の大改革を想う

武田 太一

在職の43年間は農業試験場及び大学において農業機械関係の仕事に携わって参りましたが、改めて振り返って見ますと、この間、農業機械の分野において二つの大きな改革に遭遇し体験してきたと思います。その第一は、私が初めて青森県農業試験場に勤めた頃(1949)は畜力利用が主体でしたが、この頃から農業の近代化・機械化が叫ばれて動力耕うん機やハンドトラクタが登場し、当時250万頭もいた農耕用牛馬が約20年間で完全には場から姿を消してしまいました。これは日本農業史上特筆されることと言われております。第二は大形機械の導入で、即ち、耕うん機・ハンドトラクタなどの小形機から、よりパワーとスピードを求めて大形トラクタの利用が提唱され(1958)、その後、コンバインや田植機そしてスピードスプレーヤなどの高性能機械が連続と出現し、今日見られるようなトラクタを中心とする機械化農業の一応の技術体系が確立しました。

以上の過程においては幾多の困難があったことは言うまでもないことで、私もその苦労



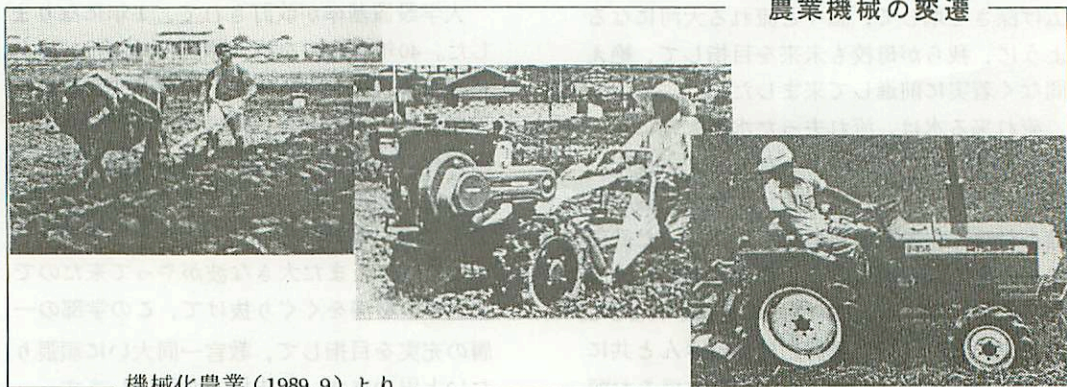
農学部同窓会新会員歓迎会にて

を味わった1人としていささか満足感を覚えております。しかし、最近の日本農業は米問題を中心として岐路に立ち、また、農家の後継者は年々減少してきて農業に対する魅力が低下している面も見られます。このような現状を打開するために、最近、法人化による大規模経営策が打ち出されましたが、これに対する農業機械の果す役割は極めて重要であると考えますので、第三の改革として成果が上るよう見守って行きたいと思ひます。

退職して早くも3ヶ月近くなりましたが、この間、在職時代のことを顧みる暇もなく、私用ながらいろいろと忙しく過して参りました。このたび、同窓会幹事の塩崎先生より寄稿依頼がありましたので、退職後の感想の一端を述べました。

終わりに、同窓会の一層のご発展と会員皆様のご健勝をお祈りいたしまして筆をおきます。

農業機械の変遷



機械化農業(1989.9)より

平成4年度は、生物資源利用学講座に元村佳恵教授、生物環境管理学講座に佐野輝男助教授、園芸農学講座に富田正徳助教授が赴任されました。3人の先生方に自己紹介の文をお願いしましたところ、快く御寄稿して戴きました。



元村佳恵
(生物資源利用学)

宮城県仙台市生まれ。東北大学農学部農芸化学科卒業、大学院修士課程修了(農産利用学専攻)後、同大学農学科園芸学講座に勤務。この6月1日付けで弘前大学に赴任しました。大学院までは当時の研究室のメインテーマであった糖化学を勉強し、園芸学講座ではジベリンによる種子なしブドウの形成についての研究を行いました。その後園芸分野で、高品質の果実生産のためには、糖化学的側面から

の研究の必要性を感じ、葉で生産された光合成産物の果実への転流と代謝・蓄積について研究を行ってきました。植物の転流物質には種特異性があるとされています。それに基づいてラフィノース類を転流物質とする植物としてメロンとキュウリについて、スクロースを転流物質とする植物としてブドウについて、放射性同位元素を用いて、葉から果実にいたる転流経路にあたる組織における転流物質の化学形態とその変化を調査してきました。次は、糖アルコールを転流物質とするリンゴなどのバラ科植物についての研究を行う予定なので、リンゴ王国弘前への転勤は天の恵と感じ楽しみにしております。



佐野輝男
(生物環境管理学)

新潟県見附市生まれ。昭和54年北海道大学農学部農業生物学科を卒業、同大学院農学研究科博士課程中退、北海道大学農学部農業生物学科植物ウイルス病学菌学講座助手として約11年間勤務の後、この4月から植物病理学教室に着任いたしました。弘前は古い城下町の雰囲気がよく保存されているきれいな町という印象ですが、半面道路が迷路のように複雑で狭いのには少々戸惑っています。ただ、新潟と北海道で雪と寒さには慣れていますから、弘前の気候、風土にはそう違和感なく馴染めそうです。

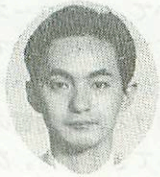
藤田先生にお願いしてモザイク病に罹ったリンゴの木のある所まで連れて行って戴きました。古い大きな木で品種はインドでした。リンゴの花弁がウイルスの分離に適していたことから、その後も花の咲く頃になると連絡を戴いて何度か採集に来ました。数年前その木が切られると言う事で、枝を何本か取って送って戴き、病原(リンゴモザイクウイルス)の保存のため北海道大学の果樹園に植えさせてもらいました。木は立派に成長しており、毎年綺麗な(?)病徴を現しています。ウイルス分離用の花弁も採集できるようになったのですが、私が弘前に移ることになり、今度は北海道に採集に行かなければならないのです。

弘前大学とは以前から何かと縁が有り、北海道大学に勤務後初めて出張した所が弘前大学でした。リンゴのモザイク病の試料を採集させていただきため、沢村先生、原田先生、

私の専門は植物のウイルス病、特に現在知られている最小の病原体“ウイロイド(VIROID)”病の研究を中心に行っています。ウイロイドはわずか300個足らずのヌクレオチドからなる裸のRNA病原体(通常の植物ウイルスのように外側に蛋白質の殻で覆われていない)ですが、ジャガイモ spindle tuber

病、ホップ矮化病、リングさび果病、キク矮化病などさまざまな重要病害を引き起こします。フィリピンに発生しているココヤシ“カダンカダン”病は、ウィロイドの感染で大きなココヤシの木が次々と枯れてしまうほどです。このようなウィロイドを相手に、この小さな病原体のどの部分がどのようにして作物に病気を引き起こすのか、核酸分子のレ

ベルから明らかにしようと現在研究を行なっているところです。また、ウィロイド病は栄養体繁殖をする果樹類に発生例が多い事から、弘前も含め果樹類の実験材料に恵まれている東北地方でこれから新たにどんなことに出会えるかと大いに楽しみにしています。どうか皆様これからよろしくお願い致します。



富田 正徳
(園芸農学)

北海道大学大学院を修了後、茨城県水戸市にあります林野庁の林木育種センターで、日本の主要造林対象樹種であるマツやヒノキ、シイタケ原木のクヌギ、そして造園・緑化樹木として用途の広いケヤキについて、バイオテクノロジーによる増殖と育種に関する研究に取り組んでおりました。今後も造園・緑化

樹の育種と大量増殖に関する研究を継続して進めたいと思っています。

また、温帯性地生ランの共生発芽の機構解明に関する研究にも取り組みたいと考えています。多くのラン類は、種子の発芽には土壤中の菌類(共生菌)の助けが必要です。しかし、いまだランと菌との関係には不明瞭な点が多いため、これを明らかにし、利用することで、商品価値が高く、しかも増殖が困難なために近年乱獲により絶滅の危機に瀕しているアツモリソウの様なラン類の遺伝資源の保護と増殖を最終的な目標として考えています(今の処夢物語ですが)。



蘭 葉 蘭
(アツモリソウ)





支部会活動報告



農学部同窓会福島県支部 1991年度総会に出席して

田 辺 良 則

昨年9月7日(土)、同窓会福島支部の年次総会があり、正木農学部長のご都合で代わって出席してきました。会場は、洗心荘、阿武隈山地大滝根山麓の鍾乳洞と温泉で知られる福島県田村郡滝根町にあります。やる気、喜び、楽しみを見つけ、スポーツを楽しんで、細胞に活性を与えるのが長生きの秘訣、などと日頃念頭にある年頃、同窓生に会える楽しみ、未知の阿武隈山地に分け入る楽しみ、よいついでに会津喜多方に帰郷されている「戦友」の手代木さん(現弘前大学長)を訪問する楽しみ、と一石三鳥を考え、喜び勇んで出掛けたのでした。

福島支部は、会員総数50名、当日出席20名、県内にあっても卒業以来初めてというもあり、手を握り合って懐かしがる風景もみられ、旧師として大事にされていることに感謝しながら議事進行を見守りました。

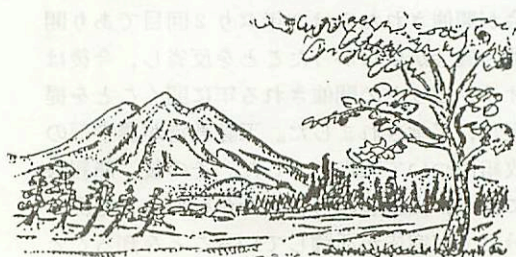
議事は、会員紹介に始まり、経過報告、会計報告と和気藹藹の雰囲気の中で進行し、新幹事を選出して無事終了しました。支部長は、福島県農試の松本馨君(昭39年卒育種)から

福島県職員の境隆君(昭39卒昆虫)に、副支部長は、境隆君から長尾銃砲火薬店の長尾八郎君(昭40卒農経)にバトンタッチされました。

このあと、例によって懇親会に移り近況報告やら在学中の思い出話に花が咲きましたが、議事、懇親会を通して、東南北端の福島県で、わが同窓生達が、助け合い励まし合いながら意気盛かんに活躍されている状況が伺い知られ、嬉しくまた頼もしいかぎりでした。

翌朝、洗心荘やら駅頭で、別れに交わした誰彼との握手の、その手の温もりを思いながら、福島県支部の発展と同窓生達の元気な活躍を祈って筆を置く次第です。

(前農学部長)



東青支部

東青支部同窓会が1年振りに3年11月28日八甲荘「王鈴の間」で60名を集めて行なわれた。農学部からは篠邊教官が出席し、農学部の大講座制について解説されたが同窓生にはまごつきがみられ、逆に懐古談に花が咲いた。同窓会からは中尾会長・工藤幹事が参加した。

大広間一杯に沢山の輪ができ、更に輪が大きくなったり、入り乱れたりして時の過ぎるのも忘れ、閉店時まで賑やかであった。

(KK)

関東支部

北冥会総会（関東支部）が3年10月19日に「弘済会館」で5年振りに開催された。特別会員から金須・奥村・矢橋元教官、同窓会事務局からは工藤総務幹事が出席し、総勢40名余の集まりであった。北冥会は500名を越える会員を擁する最大支部であるが、今回は27名の参加で若い会員の欠席が特に問題とされていたが、今回は多少盛り返した感があった。農学部改組後の講座の説明や災害写真（農学

部構内・藤崎農場・弘前公園）をみながらの台風19号の話等賑やかに閉会となった。2年間隔で総会を開くことを確認した後、北冥寮寮歌・北冥音頭・旧制弘高校歌を斉唱して解散し街へ繰出した。土曜日の夜ということで休業の店が多く会場探しに一苦労されたが、閉店間際の店を確保し深夜まで懇親を深めた。お世話になりました。

(K.K)

山形支部

6月12日、弘大農学部同窓会山形支部（弘山会）総会がサクランボの収穫を間近にひかえた天童市において開催されました。山形県在住の同窓生は現在52名、当日の出席者は14名でした。本部事務局からは工藤啓一教官と私が出席しました。当日、弘前地方は雨模様でしたが、東北自動車道を上るにつれて晴となり、山形自動車道を経由して天童までの約5時間の快適なドライブを楽しみました。

天童温泉の無色無臭のお湯につかって汗を流した後、総会は午後6時30分頃から始まりました。大竹敏博会長が挨拶し、その中で同会が開催されたのは9年ぶり2回目であり開催の機会が少なかったことを反省し、今後はオリンピックの開催される年に開くことを提案し、了承されました。工藤教官が農学部の改組について報告しました。その後、懇親会に移り、出席者の自己紹介が行われ、幅広い分野で同窓生が活躍していることを知ることができました。サクランボの輸入自由化に対抗できること。ラフランス（洋梨）の評価が非常に高く、生産が伸びていること。果樹農家の意欲が高く、後継者が多いこと。ササニシ

キに代わる新品種のこと。紅花のことなど山形県の農業事情を知ることができ、また、農業に非常に積極的に取り組んでおられることに強い感銘を受けました。お開きの後、浴衣に下駄ばきで夜の天童の街にくだしたことは申すまでもありません。

翌日は大竹会長、鈴木武氏のご案内で山寺（立石寺）を見物しました。急な登りは前夜の余韻が残る私にとってはハードなものでありましたが、山上の堂楼で吹かれた涼風には身心ともに洗われる思いがし、芭蕉が味わったであろう思いの一端に触れた気がしました。山寺から、一面に広がるサクランボ園、本年山形で開催される紅花国体の会場となる建設中の運動公園などを見ながら山形市内に帰り、山形名物のおいしい蕎麦をいただいた後、再会を約して県庁前でお別れし、弘前への帰途につきました。

大竹会長初め、弘山会の皆様にはたいへんお世話になりました。今後の皆様の益々のご発展を祈念しましてお礼といたします。

(文責 齋藤 寛)

計 報

昭和32年園芸卒業、青森県畑作園芸試験場勤務の栗生和夫さんが逝去されました。心から御冥福をお祈り申し上げます。

— 西北五支部 —

西北五支部総会が4年2月4日五所川原市内の「蝶家」で行なわれた(約40名参加)。尾野支部長(五所川原農林高校長)が今年度一杯で定年を迎えることもあって、農学部からは同期の奥瀬教官が一会員として出席してください。奥瀬教官からは改組後の大講座の説明や尾野支部長に対するねぎらいの挨拶があった。次いで尾野支部長からは次期支部

長候補が提案され、斎藤貞昭氏(40年園芸卒、鶴田町、青森県りんご試験場)が満場一致で就任することに決定した。大先輩が顔を知らない若い会員も大勢参加され楽しく、有意義な一時を過ごすことが出来ました。尾野さん初代支部長として長い間ご苦勞様でした。

(K.K)

平成3年 業務一覽

- | | |
|--------------|---------------------------------------|
| 1991. 6. 1 | 同窓会総会(正木学部長, 戸次・工藤幹事出席) |
| 1991. 7. 26 | 同窓会会報 No.12号発送 |
| 1991. 7. 13 | 福島支部会(わんどの会) 田辺前農学部長, 塩崎幹事 |
| 1991. 10. 19 | 関東支部会(北冥会) 工藤幹事, 奥村, 金須, 矢橋元教官 |
| 1991. 11. 28 | 東青支部 篠邊教官, 工藤幹事 |
| 1992. 2. 4 | 西北支部 奥瀬教官, 工藤幹事(支部長: 斎藤貞昭に交代) |
| 1992. 3. 24 | 卒業祝賀会(中尾, 岩井, 土岐, 田辺, 佐々木, 森, 伊東, 照井) |
| 1992. 6. 12 | 山形支部(弘山会) 斎藤寛教官, 工藤幹事 |

教 官 人 事

退 官

武田 太一 教 授 (生産機械学講座)

原田 順厚 助教授 (生物資源利用学講座)

昇 任

戸次 英二 教 授 (生産機械学講座)

荒川 修 助教授 (園芸農学講座)

新関 稔 教 授 (生物機能開発学講座)

城田 安幸 助教授 (生物環境管理学講座)

卜蔵 建治 教 授 (生物環境管理学講座)

工藤 明 講 師 (農業土木学講座)

安藤 喜一 教 授 (生物環境管理学講座)

福地 博 講 師 (生産機械学講座)

新 任

元村 佳恵 教 授 (生物資源利用学講座)

佐野 輝男 助教授 (生物環境管理学講座)

富田 正徳 助教授 (園芸農学講座)



▼スクールバス哀れ
昨日までは立派な車庫でした

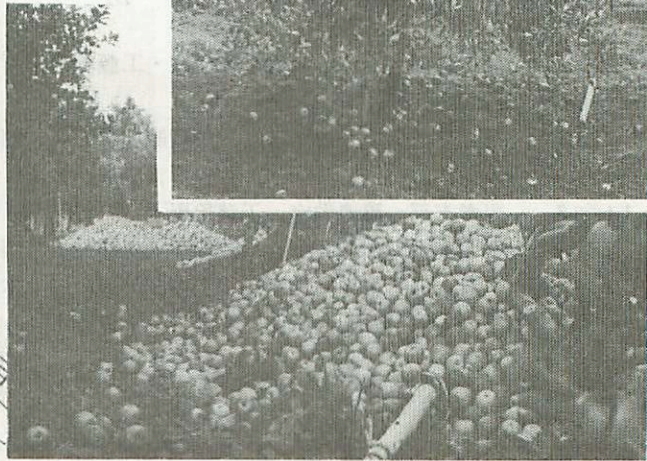


台風19号 (1991.9.28)

惨状



◀100%落ちたリンゴ樹 哀れ



◀落ちリンゴの山 累々と

▲幸運の落ちないリンゴ
しかしこの顔でお嫁
に行けるかしら



▶どこから飛んできた
屋根トタン丸ごと



▲ひとかかえもある大木 哀れ